

メディアのコンテンツ

幕末から明治となり、それまでの日本で行われてきた算術は、大きな外圧にさらされることになる。

そろばんを基本に、寺子屋で、「読み書きそろばん」として普及し、日本で独自に発展してきた算術。そのシステムは、明治五年の学制の発布で大きな危機に立たされる。

学制とは、明治の新政府が創設した学校システムのことだ。学制により、全国に小学校が作られた。学校で教える内容が全国的に統一された。このとき算術は「洋法ヲ用フ」と、西洋数学の使用が定められた。ここから日本の従来の数学は、西洋直輸入のものに取って替わられることとなる。そして江戸時代からの算術は、和算と呼ばれ、過去のものとなっていく。洋食の広まりで、日本の伝統的な食事が和食と呼ばれるようになったのと同じネーミングである。

ところが、教育現場は大変だ。「洋算」を理解する先生がいない。その頃の大人たちは、寺子屋からの「そろばんベース」の教育しかわからない。そこで暫定的に、珠算などの従来型の「和算」教育も、小学校などで継続された。しかし、世代、年代が進むにつれて、着実に西洋数学一色となっていった。そして現代、数学は x や y を使う一種の「外国語」となってしまった。

今、メディアは同じような変革期にある。テレビやラジオ、新聞、雑誌、書籍といった従来型の二十世紀型のメディアは、スマートフォンをベースとした個人の情報発信、受信のしくみに取って替わられようとしている。

だが、それが存在しなかった時代に「教育」を受けた世代にまで、その変革が即座に行き渡るはずはない。和算の例なら、和算に慣れ親しんだ世代が、第一線を退くようになり、新しい教育を受けた次世代が世の中の大半をしめるようになって、西洋数学の世界へと移行した。二十世紀のメディアも、和算と同じ運命をたどるにちがいない。

幕末から明治を生きた数学者福田理軒は、和算と洋算のどちらが優れているのかと問われたとき、「数の計算というものは、どこにでもある。物があれば必ずそこに現象がある。現象があればそこに必ず数がある。その数は必ず一定の法則に従い数式をつくる。その原理は、世界中どこでも同じだ。どうして優劣があるというのか . . .」（拙著「筆算をひろめた男」より）と答えた。

和算でやろうが洋算でやろうが、その計算の中にある根本的な内容はかわらない。その本質的な「計算のコンテンツ」は、洋算でも和算でもまったく同じで、表現方法が違うだけという意味だ。

メディアでも同じことが言える。メディアの形態がどのように変わろうとも、人からひとへ伝えたいコンテンツの根本的内容そのものは同じである。メディアは、そのコンテンツを伝えるひとつの手段にすぎない。

質の高いコンテンツを創造する。メディアの世界にとって、優れたコンテンツの創造こそが、もっとも重要なファクターなのである。

情報教育研究センター長・教授

丸山健夫